

中国帰国生の言語発達に関する調査

(バイリンガル能力の発達 - 中国残留孤児の言語発達を事例として -)

東京都立大学附属高等学校

清田洋一

はじめに

中国残留孤児の境遇に関しては、マスメディアによって様々にその姿が伝えられている。中国社会における文革時などの苦難と日本に帰国することめぐる困難な状況、また帰国後の適応をめぐる様々な問題も報道されている。

しかし、その子弟の適応の問題は、その深刻さが親や祖父母に決して劣らないものであるにも関わらず、孤児自身ほどには注目を集めてはいない。彼らは通常、教育現場において「中国帰国生」と呼ばれるが、実際は全く初めて日本社会に接するものが多く、いわゆる海外勤務者の子弟の境遇とは大きく異なる。また、孤児自身が日本社会に帰国することを強く希望しているのに対し、その子弟は必ずしも進んで来日しているのではない。日本社会における不適応の問題も起きている。

1994年度の文部省の調査では、現在、中国帰国生の総数は4,997人で、毎年小学校から高校までおよそ500人前後の帰国生が来日している。その授業の形式は帰国生の学習到達度によって、取り出し式、あるいは特別クラスが設置されている。また、日本語の理解度や、適応の度合いにより、学齢相当の学年より下の学年に編入されることも多い。

中国引揚者、およびその家族の言語環境については日本語教育の立場や、心理学的カウンセリングの立場からの研究が行われている。本調査は「中国帰国生」の場合、日本社会における社会文化的適応が特に彼らの中国語と日本語の発達を考える上で重要な要素となっていると考え、主にそのアイデンティティーに関わる視点から調査を行ったものである。

1. 本研究の背景

現在日本にいる帰国生は大きく2つに分類される。第1のグループとして主に海外勤務者の子弟の帰国生と第2のグループとして中国残留孤児関連の帰国子女と南米等からの労働者の子弟などである。このうち第2グループのものを「移民」と位置づけている研究もある。（マーハ、八代：『日本のバイリンガリズム』1991）

表1 帰国生のグループ

	第一グループ	第二グループ	
	海外勤務者の子弟としての帰国生	中国引揚者の子弟	海外からの労働者の子弟
親の日本での生活		×	×
在外地での日本語教育		×	×
日本での受け入れ校における専門教育		×	×

（ 存在する、×存在しない）

上記の表からもわかるように、海外勤務者の子弟の場合、日本の社会への密接度が第2グループに比べ明らかに高い。

学校教育機関における帰国生の受け入れ先として、第1グループの帰国子女においては私立公立を含めた帰国生のためのコースや学校がある。中国残留孤児関係の帰国生は小学校・中学校は一般の日本人生徒のクラスに入り、高校ではいくつかの公立学校に特別な受け入れ枠がある。南米等の労働者の子弟の教育はボランティアなど民間における個別的な対応や、公立学校において個々の対応にまかされているのが現状である。

第1グループの帰国生の受け入れ先は、その種類も多様で比較的うまく機能していると思われるのに対し、中国残留孤児の子弟の場合は、受け入れ先の学校における不適應の問題も多い。また日本語の習得も十分でない例も多く見られる（表2参照）。

表2 日本語習得状況

（海外勤務者帰国子女）

学校種別	小	中	高	計
支障がない	92.1%	94.6%	93.4%	92.9%
やや支障がある	6.6	4.5	5.5	5.9
支障がある	1.4	0.9	1.2	1.2

(中国帰国子女)

学校種別	小	中	高	計
支障がない	26.6%	15.5%	40.6%	23.9%
やや支障がある	35.5	28.6	37.5	33.2
支障がある	37.9	55.9	21.9	42.8

『海外子女教育の現状』文部省 昭和63年

その理由として、第1のグループの場合、現地での日本語学級や家庭において日本文化や日本についての情報に接しやすいのに比べ、中国帰国生の場合は日本に関する情報を得る機会が少ないことがあげられる。しかし、そういった在外地での情報量の差だけでなく、日本において中国帰国生を取り巻く言語環境として、母語保持や第二言語習得を促進したり、あるいは妨げる様々な要因が存在すると考えられる。本研究では、言語習得における社会文化的研究に関する先行研究の成果と、中国帰国生の教育環境を考慮し、以下のように設定した。

- ・ 日本社会、および、中国社会への好意的な態度の度合い
- ・ 日本社会の肯定的または否定的なイメージ
- ・ 生活様式の変化
- ・ 日本社会で、帰国生が身近に接触する具体的な事例に対する不満度（教師、授業、日本生まれの級友、日本のメディアなど）
- ・ 帰国時からの被差別的経験
- ・ 中国語と日本語に対する好感度
- ・ 将来の計画（進路、永住先）
- ・ 中国語と日本語の使用頻度

2. 先行研究

第二言語習得に関する社会文化的要因の研究として、本研究では特に2種類の代表的な先行研究を参考にした。それは、Schumann (1978) の「ビジン化仮説」と、Giles and Byrne (1982) の「応化モデル」である。Schumann (1978)の研究は、社会心理学的な距離と第二言語習得の関係をあつかったもので、考慮すべきいくつかの重要な要素をあげている。また、Giles and Byrne (1982)の研究は、言語グループ同士の関係と第二言語習得の関係をテーマとしている。

本研究は、この2つの先行研究の成果を参考にし、全体の理論的枠組みを設定したが、これらの研究においてもまだ未解明な部分がある。それは、影響を与えるとみられる要素のそれぞれの影響度の違い、言語への態度の違いと動機付けについて、第一言語に対する場合と第二言語に対する場合の態度や動機の相違といったことがあげられる。特に以上の観点に留意して、中国帰国生の文化適応がその言語発達に与える影響の調査を目的に、本研究をすすめる。

3. 中国帰国生の言語環境の調査結果

(各項目は未回答による欠損があり、必ずしも合計が88人とはならない)

年齢	15	16	17	18	19	20	21
人数	1 (1.1%)	11 (12.5%)	29 (33.0%)	18 (20.0%)	16 (18.2%)	11 (12.5%)	2 (2.3%)

滞在年数	3	4	5	6	7	8
	22 (25.0%)	18 (20.5%)	23 (26.1%)	16 (18.2%)	7 (8.0%)	2 (2.3%)

出身地

出身地	黒竜江省	遼寧省	吉林省	河南省
人数	50 (56.8%)	18 (20.3%)	11 (12.3%)	3 (3.4%)

福建省	内モンゴル自治区	山西省	浙江省
2 (3.4%)	2 (2.3%)	1 (1.1%)	1 (1.1%)

本研究の方法として、都立高校に在籍する中国帰国生に対し、質問紙調査と中国語および日本語の能力検査を行った。結果として、88名の標本を採用した。その際、社会的文化的影響が現れるとみられる最低期間を3年として、来日後3年以内のものは除外した。中国語および日本語の能力試験では、基本的な能力を計るために両言語の基本語彙試験を行った。これは、小野(1994)、およびCummins他(1987)の「語彙力がその言語能力を代表できる」という研究をふまえている。

語彙力試験は20問の設問で、1問につき1点、それぞれの語彙の正しい意味を選択する形式である。その結果は以下の通りである。中国語の平均点16.45。日本語の平均点14.29。それぞれの言語の年齢相応の点と比較するために、同じ問題の試験を、中国語は上海および大連の中学校、日本では国立市の公立中学校で実施した。結果は中国語は上海19.5、大連18.6、日本語18.5であった。サンプル調査の結果から、両言語の試験とも16点以下をその年齢相応の運用能力に達していないと判断した。テスト結果の区分は以下ようになった。

	人数	比率
中国語、日本語とも17以上	14	16%
中国語17以上日本語16以下	41	47%
中国語16以下日本語17以上	10	11%
中国語、日本語とも16以下	23	26%
合計	88	100%

両言語ともに16点以下のグループが26%で、全体の4分の1を占めているという結果は特に注目すべき結果であろう。

3.2 質問紙調査の各項目の結果

3.2.1 両社会への好感度

	とても嫌い	嫌い	どちらとも言えない	好き	とても好き	合計
日本の社会や文化が好きですか	1(1.1%)	4(4.5%)	31(35.2%)	35(39.8%)	17(19.3%)	88(100)
中国の人々は日本の社会や文化が好きだと思いますか	1(1.1%)	7(8.0%)	48(55.2%)	22(25.3%)	9(10.3%)	87(100)

日本社会への好感度を問う質問に対し、5段階の尺度で答えを設定した。「好き」35(39.8%)および「とても好き」17(19.3%)でその合計は52(59%)となっている。これは「嫌い」、「とても嫌い」の合計が5(5.6%)であることを考慮すると、帰国生はおおむね日本社会に好意的であるといえる。

	とても嫌い	嫌い	どちらとも言えない	好き	とても好き	合計
中国の社会や文化が好きですか	1(1.1%)	4(4.5%)	14(15.9%)	40(45.5%)	29(33.0%)	88(100)
日本の人々は中国の社会や文化が好きだと思いますか	1(1.1%)	12(13.8%)	46(52.9%)	22(25.3%)	6(6.9%)	87(100)

中国社会に対する好感度では、「好き」40(45.5%)、「とても好き」29(33.0%)で、その

合計は69(78.5%)となっており、日本社会への好感度よりもさらに高い結果となっている。

3.2.2 日本社会の具体的な事例に対する不満度

次に日本社会での具体的な事例に対する不満度を問う質問では以下のような結果となった。

日本社会の具体的な事例	不満あり	不満なし
学校の教師	20(23.3%)	66(76.7%)
日本生まれの級友	44(50.6%)	43(49.4%)
同じ中国帰国生	12(14.1%)	73(85.9%)
学校の授業	21(24.4%)	65(75.6%)
近隣の人々	19(22.6%)	65(77.4%)
日本の生活習慣	16(18.8%)	69(81.2%)
日本のメディア：新聞、テレビなど	12(14.5%)	71(85.5%)

全体的に不満度が低い結果となっているが、日本生まれの級友に対しては44(56.0%)と他の事例に比べ「不満あり」が著しく高い比率を示している。日本生まれの一般生が中国帰国生と特に相互接触の機会が多いと思われる事例であることは注目すべきである。

3.2.3 生活習慣

	はい	いいえ
まだ中国での習慣を続けている	32(38.1%)	52(61.9%)
中国での習慣をやめた	20(24.7%)	61(75.3%)
日本での新しい習慣を身につけた	42(50.6%)	41(49.4%)

帰国生の生活習慣の変化に関する質問で、「中国で身につけて、日本に来てからやめてしまった生活習慣はあるか」に対して、「ない」と答えているものが61(75.3%)で、多くのものが中国社会での生活を放棄していないことを示している。

日本社会での経験に関しては、10の経験の中から(5つずつ肯定的、否定的なものを含む)、自分が経験したものをすべて選ぶ質問となっている。否定的な経験が1つもないと答えている生徒が38(45.2%)となっており高い比率となっている。

3.2.4 中国語および日本語への好感度

	1 とても嫌い	2 嫌い	3 どちらとも 言えない	4 好き	5 とても好き
中国語	3(3.5%)	3(3.5%)	20(25.9%)	22(25.9%)	37(43.5%)
日本語	0(0.0%)	6(24.1%)	21(24.1%)	38(43.7%)	22(25.3%)

中国語および日本語を話すことへの好感度を問う質問では、中国語に関しては、「好き」、「とても好き」と答えたものが、59(69.4%)であり、また日本語に関しては、60(69.0%)とほぼ同数になっている。

3.2.5 言語への態度

「人前で、中国語/日本語を話すのが恥ずかしいまたはいやだと思ったことがありますか」という設問で言語使用時の自己意識を質問した。

	ある	ない
中国語	49(56.3%)	38(43.7%)
日本語	41(47.7%)	45(52.3%)

「人前で、中国語/日本語を話すのが恥ずかしいまたはいやだと思ったことがありますか」という質問に対しては、両言語ともほぼ半数が、「ある」と答えている。

3.2.5 将来の子供の言語

	全く望まない	望まない	どちらとも いえない	望む	強く望む
将来、自分の子供が中国語を話すことを望むか	1 (1.2%)	4 (4.7%)	5 (5.9%)	13 (15.3%)	62 (72.9%)

「将来、自分の子供が中国語を話すことを望みますか」を、5段階の尺度で質問した。その結果は、「望む」13(15.3%)、「強く望む」62(72.9%)となっており、大多数の帰国生が、中国語の継承を望んでいる。

3.2.6 言語学習

	全く学習する 気になれない	あまり熱心で はない	学校でふつう に	学校で熱心に	学校と家庭で熱 心に
中国語	8(9.5%)	2(2.4%)	29(34.5%)	2(2.4%)	43(51.2%)
日本語	3(3.5%)	6(7.1%)	45(52.9%)	14(16.5%)	17(20.0%)

中国語と日本語に対する学習態度を問う質問で、5段階の尺度で答える設定である。最も熱心と分類した「学校でも家庭でも熱心に取り組んでいる」と答えたものは、中国語に関しては43(51.2%)、日本語に関しては17(20.0%)となっている。これは、新しい言語である日本語よりも、帰国生の第一言語である中国語の保持、伸長の方が優先されていることが示されている。

3.2.8 進路

	日本	中国	未定
高校卒業後	68(80.0%)	10(11.8%)	7(8.2%)
永住国	38(44.2%)	12(14.0%)	36(41.9%)

将来の進路を問う質問では、永住先として、日本をあげているものは38(44.2%)で、未定は36(41.9%)となっている。まだ多くの帰国生がその最終的な態度を決めかねていることを示している。

3.2.9 言語使用

どちらの言葉で話しかけられますか

	いつも中国語	日本語より中 国語の方が多 い	日本語と中国 語が同じくら い	中国語より日 本語の方が多 い	いつも日本語
父	55(68.7%)	22(27.5%)	3(3.7%)	0(0%)	0(0%)
母	59(71.0%)	20(24.0%)	3(3.6%)	1(1.2%)	0(0%)
兄弟姉妹	27(35.5%)	14(18.4%)	16(21.0%)	11(14.4%)	8(10.5%)
中国帰国生	14(16.2%)	16(18.6%)	23(26.7%)	22(25.5%)	11(12.7%)

日本生まれの友達	1(1.2%)	2(2.4%)	4(4.8%)	1(1.2%)	74(90.2%)
先生	4(4.5%)	11(12.5%)	1(1.1%)	4(4.5%)	68(77.2%)

3.2.10 家庭言語と学校言語

得点	3～5	6～8	9～11	12～15
家庭言語	0(0.0%)	6(6.8%)	27(31.0%)	54(62.0%)
学校言語	47(54.6%)	29(33.7%)	5(5.8%)	5(5.8%)

(得点が多いほど中国語の使用頻度が高い)

3.2.11 どちらの言語を使うか(状況別)

	いつも中国語	日本語より中国語の方が多い	日本語と中国語が同じくらい	中国語より日本語の方が多い	いつも日本語
驚いたとき	16(19.5%)	6(7.3%)	11(13.4%)	11(13.4%)	38(46.3%)
テレビやビデオを見るとき	13(15.2%)	8(9.4%)	4(16.4%)	11(12.9%)	39(45.8%)
新聞、漫画	7(8.0%)	4(4.5%)	12(13.7%)	15(17.2%)	49(56.3%)
CD/カセット	16(20.5%)	8(10.2%)	24(30.7%)	9(11.5%)	21(26.9%)
歌を歌うとき	21(25.0%)	10(11.9%)	22(26.1%)	7(8.3%)	24(28.5%)
買い物	5(6.0%)	4(4.8%)	4(4.8%)	9(10.9%)	60(73.1%)
友達とおしゃべり	14(17.0%)	8(9.7%)	17(20.0%)	17(20.0%)	26(31.7%)
電話	11(13.0%)	9(10.7%)	20(23.8%)	11(13.0%)	33(39.2%)

中国語と日本語の使用に関する質問で、学校では、日本語使用の割合が高くなり、家庭内言語との違いが現れている。家庭内においても、父親および母親とは両者ともに帰国生に中国語のみで話しかけると答えているのに対し、兄弟とは53.9%が、中国語と日本語が同じくらいか、日本語の方が多いと答えていて、言語移行の傾向が現れている。帰国生自身の言語使用に関しては、買い物、新聞、などの日本社会との接触では、日本語が多く使用されているのに対し、CDを聞いたり、歌を歌うなどの情緒的な面に関しては、中国語が多くなっている。

4 相関関係の調査

質問紙調査と中国語と日本語の言語能力との相関関係に対して統計的調査を行った。以下がその結果である。

4.1 性別との相関

中国語

	中国語16点以下	中国語17点以上	合計
男子	11(33.3%)	22(66.7%)	33(100%)
女子	24(43.6%)	31(56.4%)	55(100%)
合計	35(39.8%)	53(60.2%)	88(100%)

$p=0.37$ n.s., Fisher's exact method

日本語

	日本語16点以下	日本語17点以上	合計
男子	23(69.7%)	10(30.3%)	33(100%)
女子	37(67.3%)	18(32.7%)	55(100%)
合計	60(68.2%)	28(63.0%)	88(100%)

$p=1.18$ n.s., Fisher's exact method

中国語、日本語ともに性別による差異は見られなかった。

4.2 日本における居住期間

居住期間を3~4年のグループと5~7年のグループに分けて、中国語と日本語の能力との相関を見た。居住期間3~4年のグループは中国語の能力が高く、日本語の能力に支障がでている。しかし、5~7年のグループになると中国語日本語ともに相関関係は見られない。来日後5年を経過したものは、その言語発達に居住期間以外の要因が働くとみられる。

4.3 中国社会および日本社会に対する好感度と両言語の能力の相関

中国社会に対して

	中国語16点以下	中国語17点以上	合計
とても嫌い	1(100%)	0(0.0%)	1(100%)
嫌い	1(25.0%)	3(75.0%)	4(100%)
どちらともいえない	4(28.6%)	10(71.4%)	14(100%)
好き	18(45.0%)	22(55.0%)	40(100%)
とても好き	11(37.9%)	18(62.1%)	29(100%)
合計	35(39.8%)	53(60.2%)	88(100%)

日本の社会に対して

	日本語16点以下	日本語17点以上	合計
とても嫌い	1(100%)	0(0.0%)	1(100%)
嫌い	2(50.0%)	2(50.0%)	4(100%)
どちらともいえない	22(71.0%)	9(29.0%)	31(100%)
好き	24(68.6%)	11(31.4%)	35(100%)
とても好き	11(64.7%)	6(35.3%)	17(100%)
合計	60(68.2%)	28(31.8%)	88(100%)

両言語ともにその好感度の強さとの相関に、有意差は見られなかった。その社会に対する肯定的な態度がその言語への動機付けになると予想されるが、本調査の結果から見て、その影響度は間接的なものと言えよう。

4.4 生活様式の変化との相関

中国の習慣と中国語との相関

	中国語16点以下	中国語17点以上	合計
まだ中国での習慣を維持している	14(43.8%)	18(56.3%)	32(100%)

中国の習慣をやめてしまっている	21(40.4%)	31(59.6%)	52(100%)
合 計	35(41.7%)	49(58.3%)	84(100%)

p=0.82 n.s.,Fisher's exact method

日本の習慣と日本語との相関

	日本語16点以下	日本語17点以上	合 計
日本で新しい習慣を身につけた	29(69.0%)	13(31.0%)	42(100%)
日本で新しい習慣を身につけていない	27(65.9%)	14(34.1%)	40(100%)
合 計	5(67.%)	27(32.5%)	83(100%)

p=0.81 n.s.,Fisher's exact method

「中国社会での生活習慣をまだ身につけている」ものと「やめてしまったものがある」もののグループと中国語との相関では有意差は見られなかった。また、「日本で新たに生活習慣を身につけた」ものと「新たに身につけた習慣はなし」のグループと日本語との相関においても有意差は見られなかった。

4.5 日本における肯定的な経験および否定的な経験との相関

肯定的および否定的経験の回数と両言語との相関では有意差は見られなかった。

4.6 日本社会における具体的な事例に対する不満度との相関

学校の教師に対して

	日本語16点以下	日本語17点以上	合 計
不満あり	15(75.0%)	5(25.0%)	20(100%)
不満なし	45(68.2%)	21(31.8%)	66(100%)
合 計	60(69.8%)	26(30.2%)	86(100%)

p=0.59 n.s.,Fisher's exact method

日本生まれの友達に対して

	日本語16点以下	日本語17点以上	合 計
不満あり	38(86.4%)	6(13.6%)	44(100%)
不満なし	22(51.2%)	21(48.8%)	43(100%)
合 計	60(69.0%)	27(31.0%)	87(100%)

***p=0.00047,Fisher's exact method

日本の習慣に対して

	日本語16点以下	日本語17点以上	合 計
不満あり	11(91.7%)	1(8.3%)	12(100%)
不満なし	48(61.5%)	25(34.2%)	73(100%)
合 計	59(68.6%)	26(30.6%)	85(100%)

†p=0.09,Fisher's exact method

学校の授業に対して

	日本語16点以下	日本語17点以上	合 計
不満あり	19(90.5%)	2(9.5%)	21(100%)
不満なし	40(61.5%)	25(38.5%)	65(100%)
合 計	59(68.6%)	27(31.4%)	86(100%)

**p=0.01,Fisher's exact method

近所の人々に対して

	日本語16点以下	日本語17点以上	合 計
不満あり	17(89.5%)	2(10.5%)	19(100%)
不満なし	40(61.5%)	25(38.5%)	65(100%)
合 計	57(67.9%)	27(32.1%)	84(100%)

*p=0.025,Fisher's exact method

日本のメディアに対して

	日本語16点以下	日本語17点以上	合 計
不満あり	10(83.3%)	2(16.6%)	12(100%)
不満なし	47(66.2%)	24(33.8%)	71(100%)
合 計	57(68.7%)	26(31.3%)	83(100%)

p=0.323 n.s., Fisher's exact method

中国帰国生にとって身近な事例と日本語能力との相関を調べた。学校の教師、日本生まれの級友、日本の生活様式、授業、近隣の人々、日本のメディアに対して不満を持っているものと日本語の能力との相関で、このうち、日本生まれの級友、授業、近隣の人々に対して不満があるものに有意差が見られた。特に日本生まれの級友に対しては、不満を持っているもののうち86.4%がその日本語能力に支障が見られた(**p=0.00047)。このことは日本社会で、中国帰国生にとって普段関わり合いが深いと思われる日本生まれの級友との関係が、中国帰国生の日本語発達に影響を持っていることを示している。

(7) 言語への態度

中国語

	中国語16点以下	中国語17点以上	合 計
人前で話すのがいや、または恥ずかしいと思ったことがある	21(42.9%)	28(57.1%)	49(100%)
人前で話すことがいやまたは恥ずかしいと思ったことはない	13(34.2%)	25(65.8%)	38(100%)
合 計	34(39.1%)	53(60.9%)	87(100%)

p=0.507 n.s., Fisher's exact method

日本語

	日本語16点以下	日本語17点以上	合 計
人前で話すのがいや、または恥ずかしいと思ったことがある	21(42.9%)	28(57.1%)	49(100%)
人前で話すことがいやまたは			

は恥ずかしいと思ったこと はない	13(34.2%)	25(65.8%)	38(100%)
合 計	34(39.1%)	53(60.9%)	87(100%)

**p=0.01 n.s.,Fisher's exact method

「中国語および日本語を人前で話すのを恥ずかしい、またはいやと思ったことがある」と、両言語との相関を調べた。日本語においては、その能力に支障があるものと「恥ずかしい、またはいやだと思ったことがある」ものとの相関に有意差が見られた。一方、中国語においては、有意差は見られなかった。これは、日本語の場合、「うまく使えないので、人前で話すのが恥ずかしい」ことが理由として考えられるのに対して、中国語の場合はその能力に関係なく、日本社会において中国語を使用すること自体に、帰国生が問題を感じていることが理由として考えられる。

4.8 将来の子供の言語

「将来、自分の子供が中国語を話すことを望む」とことと中国語の能力との相関では有意差は見られなかった。「望む」、「強く望む」の合計は、75(88%)となっており、帰国生が中国語の継承を望んでいる傾向が現れている。言い換えれば、中国語の能力に関係なく、大多数のものが中国語の継承を望んでいるということになり、中国帰国生にとって第一言語である中国語がそのアイデンティティーに関わる象徴的な意味合いを持っていることがわかる。

4.9 言語使用

	中国語16点以下	中国語17点以上	合 計
日本語使用の度合いが高い	23(46.9%)	26(53.0%)	49(100%)
中国語使用の度合いが高い	11(30.6%)	25(69.4%)	36(100%)
合 計	34(40.0%)	51(60.0%)	85(100%)

p=0.178 n.s.,Fisher's exact method

	日本語16点以下	日本語17点以上	合 計
日本語使用の度合いが高い	26(53.1%)	23(46.9%)	49(100%)
中国語使用の度合いが高い	32(88.9%)	4(11.1%)	36(100%)

合 計	58(68.2%)	27(31.8%)	85(100%)
-----	-----------	-----------	----------

***p=0.0007, Fisher's exact method

中国語、日本語の使用頻度と、両言語との相関を調べた。中国語、日本語の使用頻度と中国語能力との相関では有意差は見られなかったが、中国語の頻度が高いものと、日本語の能力に支障があるものでは有意差が見られた。このことは、本研究の調査結果を考慮すると、何らかの原因で帰国生が中国語に頼ることが、日本語の習得を遅らせることにつながっていると考えられる。

5 結論

質問紙調査、語彙力テストおよびその相関関係の調査から得られた注目すべき結果は以下の通りである。

- ・半数以上の中国帰国生が中国、日本両社会に対して肯定的な印象を持っているが、日本社会に比べて中国社会により好ましい印象を持っている。
- ・大多数の生徒が、生活習慣を変えようとはしていない。
- ・日本社会に対する肯定的なイメージは経済的な側面に関したものが多い。

- (1) 交通や通信が発達した国 (58)
- (2) 技術の進んだ国 (55)
- (3) 産業や経済が発達している国(42)
- (3) 国民がよく働く国 (42)
- (4) 教育の程度が高い国 (35)
- (5) 色々な娯楽がある国 (34)
- (6)生活水準が高く、暮らしやすい国 (33)
- (7) 建物や道路がきれいな国(27)
- (7) 不親切な人が多い国 (27)

文末の()内の数字は人数

- ・帰国生にとって身近な事例のうち不満を抱いているものは多くないが、日本生まれの級友に対しては50%以上が不満を抱いており、日本語能力との相関では、高い有意差が見られた。
- ・日本語よりも中国語の方が、人前で話すことに抵抗を感じている。
- ・その言語能力に関係なく、中国語が将来自分の子供に継承されることを望んでいる。

- ・日本語の習得より、中国語の保持、伸長に重点が置かれている。
- ・悩みがあるときの相談相手として、74.4%が中国語話者のみとなっている。

以上の結果から、以下の3点が結論される。

- (1) 中国帰国生にとって中国語と日本語は異質の言語であり、特に中国語は帰国生のアイデンティティーに結びついた象徴的な意味合いを持っている。
- (2) 日本語は道具的動機（より良い暮らしにためなど）で学習され、中国語は統合的動機（その言語グループへの帰属意識）で学習されている傾向がある。
- (3) 中国帰国生にとって、日本社会での文化適応が彼らのアイデンティティーにとってプラスの影響がある場合は、バイリンガル能力の発達につながり、マイナスの影響の場合は両言語とも不十分なままになる場合がある。

中国帰国生の教育環境を考える場合、日本社会への同化を急がず、帰国生のアイデンティティーの確保が彼らの中国語、日本語の発達に大きく影響することを考慮すべきである。特に中国帰国生を一つの言語集団としてとらえ、その言語環境を日本語話者集団との関係でとらえていく必要がある。

(注)

本稿は1995年度の東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻における修士課程論文の要旨である。さらに詳しい報告、及び参考文献については修士論文本文（英文）を参照願いたい。さらに本研究の結果を踏まえて中国帰国生の言語発達を特に「言語集団」としての視点でとらえた研究を引き続き行っている。その研究の準備段階の論文も併せて参照願いたい。

謝辞

本調査の実施にあたって、東京都内の多くの中国帰国生の参加を得た。また中国帰国生を受け入れている中学校、および高等学校の各担当の協力を得た。日頃の指導の忙しい中、快く本調査の協力を引き受けていただいたことに感謝したい。

また、特に都立高校の中国帰国生の受け入れ校の集まりである中国帰国生徒受け入れ校懇談会には、日頃の帰国生の指導に関する情報提供だけでなく、本調査の実施に関しても大きな協力をいただいた。

1996年 1月 18日

都立北高等学校中国帰国生担当（当時）

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

清田 洋一